

「実りある歩みを」

エゼキエル書
ガラテヤ人への手紙

第11章 17節～21節
第5章 16節～26節

説教 本庄侑子伝道師

ガラテヤ人への手紙は、ユダヤ人キリスト者のある主張を背景としています。救いは律法を守ることによってではなく、キリストへの信仰のみによる、ということには分かったけれども、キリスト者として肉の働きを断って生きるためには、救われた後にこそ律法が必要ではないか、という主張です。

規則を守ることによって肉の働きを断つ、という考えは現代社会でも広く受け入れられています。私たちは自分を律するために、規則を設け、目標を掲げます。ユダヤ人キリスト者も同じでした。その根底には悪意ではなく、教会を思う熱心や正義感があったのかもしれませんが。しかし、結果的にパウロが見たのは、「互にかみ合い、食い合っている」(15節)姿でした。

パウロは命じます。「わたしは命じる。御霊によって歩きなさい。」(16節)御霊とは、神の霊、イエス・キリストの霊、聖霊のことです。この命令は、「愛をもって互いに仕えなさい」(13節)とも言い換えられます。続く6章では、その具体的な内容が記されます。

「もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。」(第6章1節)この「正しなさい。」は、英語では「restore(立て直す)」「mend(修理する)」「create(造り出す)」といった言葉で訳されます。他のパウロ書簡では「同じ心、同じ思いになって、堅く結び合う」、「信仰の足りないところを補う」のように訳され、「滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ぶ」、「わたしのために、からだを備える」と、罪を贖ってくださったキリストの体そのものを指すほどの言葉でもあります。さらには、「互いに重荷を負い合いなさい。」(2節)とあるように、誰かの重荷を負い、自分の重荷も誰かに負ってもらいます。

誰かの罪によって壊れてしまった部分を修復するために、自ら代わりに重荷を負う。一体誰にそんなことができるでしょうか。むしろ、罪によって穴をあけた人を断罪し、関わりを断とうとするのが私たちの常識かもしれません。しかし、キリストは違ったのです。本当に正してくださったのです。私たちの罪の重荷を代わりに背負って死に、私たちがボロボロにしてしまった神との関係を修復してくださいました。それがキリストの愛、私たちが受けた愛、聖書

が語る神の愛です。キリストの霊である御霊は、キリストご自身の愛を私たちに思い起こさせ、その愛によって私たちを導きます。

肉の働きに終始してしまうとき、私たちは自分で自分を律さなくていいのです。十字架につけられたキリストのお姿を知り、その愛を受けたからです。私たちは、礼拝生活を通して、御霊の助けにより、「愛さなくてはならない。」という肉の目標を飛び越えて、むしろ愛さずにはいられなくなります。キリストの愛は私たちを駆り立て、私たちの常識や限界を越えていきます。

22節に御霊の実がリストアップされています。キリスト教的愛の倫理として教え込まれる道徳訓かもしれませんが。しかし、元の言葉では、御霊の「実」は単数形で記されます。様々な御霊の実は、最初に記される「愛」の言い換えに過ぎないということでしょう。御霊の実は、キリストの愛と切り離せません。私たちが自力で実を造り出すのではなく、キリストの愛が私たちに実りをもたらすのです。

「もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか。」(第5章25節)この「進もう」は「march(隊列を組んで行進する)」という意味を持ちます。御霊は私たちに隊列を組んで歩ませます。一人にはさせません。キリストの愛に導かれ、愛するという一つの方向に向かって歩み続ける集団の中で生かします。

ガラテヤ人への手紙はパウロの祈りの言葉で締めくくられます。元の言葉では「兄弟たちよ」(第6章18節)という呼びかけで終わっています。どれほど厳しい言葉を語っても、パウロを駆り立て、彼らに結びつけるキリストの愛、御霊のマーチから去ることなどできなかったのです。むしろ、自分から「兄弟たちよ」と語りかけ、御霊のマーチを盛り上げて手紙を書き終えました。御霊のマーチは、どれだけ回り道をしようとも、最後には愛するという結論に向かって歩ませます。パウロが招かれ、私たちが招かれたのは、重荷を負い合い、愛をもって互いに仕え、御霊によって進む、そんなキリストの教会です。

(記 本庄侑子)